

対話による伝道

対話を進めていくために、どのようにしてまず相手の話を聞けばよいか？

デビッド・ゲスラー

今日、まだクリスチャンになっていない人たちに、キリストを知ってもらうためにどのような準備をすればよいか考えることはひじょうに大切である。それには私たちが信じていることを宣言するよりも、**真理に自分で気づくように助けるほうがよい**。そのためにはノンクリスチャンの友人が **自分の信じていることを注意深く観察できるように自分自身の見方の中にはっきりしない点を浮き上がらせるような種類の質問を考えなければならない**。こうすると、キリストについて聞くことにオープンになるであろう。このことを行なうには、ミュージシャンの役割を果たすことが求められる。すなわち、彼らの信じていることと私たちの信じていることの中に見られる「**不協和音**」（つまり**不一致点**）を聞いていく耳を持たなければならないということである。これこそが、対話による伝道のモデルである。

対話による伝道（弁証学）方法は4つの形式に分けられる：人が実際に信じていることを聞く、それに関する質問をする、彼らの信じていることをはっきりとさせる、真理を阻んでいるものは何かを知って、真理へのかけ橋を作る。私たちがノンクリスチャンの友人の人生に果たすことのできる役割には次のような形式がある：ミュージシャン、アーティスト、考古学者、建築家である。まず、ミュージシャンの役割について見てみよう。

対話形式の伝道アプローチで私たちが最初にすべきステップは、相手の言っていることを聞くことである。残念なことに、多くの場合、私たちはノンクリスチャンの友人と会話する時、彼らの背景を推測して話しがちである。また、彼らが本当に信じているものは何か理解できるほど真剣に聞いていないことが多い。現代人が宗教的な見解をしっかりと持っていることはほとんどないので、彼らの言うことをしっかりと聞くことは、特に大切である。例をあげると、タクシー運転手が自分は仏教徒であると私に言ったことがある。そこで熱心な仏教徒であるのかと聞いたら、彼は「**無宗教に近いな**」と答えを変えてきた。このことから、彼らが本当に信じていることは何かを理解するためには、何の先入観も持たずに彼らの話を聞くことが**非常に**大切である。

私たちがミュージシャンとしての役割を果たす時、相手の話を聞くスキルを伸ばす必要がある。しっかり聞いていないと、**その人の信条の核の部分に関する正直な疑問を浮き上がらせるような質問ができず、代わりに不必要に自己防御的にさせてしまって、会話がそれ以上発展しなくなる**。ヤコブ1：19には次のように書かれている。「愛する兄弟たち。あなたがたはそのことを知っているのです。しかし、だれでも、聞くには早く語るにはおそ

く、怒るにはおそいようにしなさい。」聞くスキルを伸ばすために役立つことは、相手の言うことを**復唱**することである。たとえば、彼の語っていることを「**今おっしゃったことはこういうことだと思いますが、合っていますか。**」とか「あなたの言っていることは、……なのですね。」と言い換えることである。

聞くことが大切な理由**は**少なくとも3つある：第一に、人とよりよくつながることができるということである。人は自分の関心事が他人に理解され、忍耐して聞いてもらっていると知ると感謝する。二番目の理由は、人に安心感を与えることである。人はあなたが心から理解しようとしているのがわかると、自分を防御しようとしなくなり、正直になろうとする。三番目の理由は、それが知的、感情的、霊的な理由如何にかかわらず、**キリストを信じるのに障害となっているものが何であるか**が明らかになることである。聖書にも聞くことの大切さについて次のように書かれている。「よく聞かぬうちに返事をする者は、愚かであって侮辱を受ける。」（箴言18：13）

私たちがミュージシャンのように他の人たちの言うことを聞いていると、彼らの話の中にある不協和音を聞き分けたいと思うようになる。あなたは「この不協和音はどういう意味ですか」と聞くかもしれない。あなたはだれかが音程をはずれて歌っているのを聞いたことがないだろうか。その人の声が高過ぎるのか、低過ぎるのかわからなくても、何かがちょっと違うという感覚である。それが人と話している時にも何かが違っていると感じるのである。それらは私たちにとっては、「不協和音」なのである。たとえば、ある人が熱心な仏教徒だと言っても、宝くじに当たることを願っている場合である。このようなことは不協和音と言えないだろうか。仏教徒でありながら、仏教の教える中心的な原則からはずれていると言えないだろうか。不協和音を聞くことによって、私たちは彼らに彼らの信じているものはあやふやであるとわからせたい。そのためには、私たちは的を得た質問をして、彼らが自分たちの信じていることについて真剣に考えさせ、同時に**キリストという方**について考えさせたいのである。

私たちは、4つのタイプの「不協和音」について具体的に聞く必要がある。それらは**信条VS心の願い、信条VS行動、信条VS信条、非論理的信条**である。これらひとつひとつについて具体的にみていくことにしよう。

不協和音 1 :

信条VS心の願い

不協和音の1番目のタイプは、信条VS心の願い、すなわち、世界観と心の願いの間に見られる不協和音である。ポストモダンカルチャーの現代、若い人たちの間には、自分より

も大きな何かに属していたいという強い願いがある。けれども、彼らの世界観は彼らの人生に究極的な意味や目的を与えるものではない。たとえば、9・11同時多発テロのすぐあと、「死後の世界など存在しない、天国も地獄もない」と考える学生と話したことがある。けれども、彼はこのような事態を引き起こしたテロリストは、死んだあと、彼らの犯したことに対する裁きがあると考えていた。彼は無神論的な世界観を持っていたが、彼の心は正義が果たされるべきであるという叫びで満ちていた。

宗教に関係なく誰もが他を知りまた他に知られたいという願いと、(その人には分かっていないが)究極の他者である「神」を知りたいという心の願いがある。フランス人の数学者であり、哲学者であり、物理学者であるパスカルは心の願いについて次のように語っている。「すべての人々の心には、神によって造られた隙間がある。その隙間はイエス・キリストを通して現わされている創造主である神によってしか満たされることができない。」

この世界に存在する多くの宗教には、それぞれの考え方、見方があるが、人々の心の願いと完全に一致するものではない。たとえば、ヒンズー教の教える神は人格を持たない神で、個人的に関わることができない。けれども、人の心はそれ以上のものを求めようとする。仏教の目指すことは、抽象的な無である涅槃の状態になることである。しかしながら、涅槃の境地に達するには人間性を無くすことが必要であり、これは人の心の叫びに逆らうことである。更に、涅槃に到達するには、完全には守り行うことのできない厳しい戒律や規則を遵守する生活態度が要求される。イスラム教の教えは、神と親しい関係を持ちたいと願う心の叫びをシャットアウトする。キリスト教だけが人の心の叫びに応えることができるのである。

不協和音 2 : 信条VS行動

別の不協和音は信条VS行動に見られるものである。人が信じていると語っていることと、彼らの生き方や行動の間には矛盾が見られる。たとえば、使徒パウロがペテロの行動には矛盾があると直言していることがガラテヤ2：14-16に書かれている。ペテロは無割礼の者と一緒に食事をしていたが、ユダヤ人が来ると、彼はそうするのをやめた。そこで、パウロはペテロの信条と行動が一致していないと責めたのである。同じように、多くの人々も彼らが信じていると言っている生き方をしていないことがしばしばである。例を挙げると、私はある時、車の整備工と話していたことがある。私は彼に「仏教が主に目指していることのひとつは、無欲になることではないのか？」と聞いてみた。彼は「そのとおりだ」と答えた。そこで私は彼に「仏教の目指すことが欲を絶つことであるなら、親が子どもを持ちたいと願うことも絶たなければならないのか？」と聞いてみた。しばらくして彼は次

のように答えた。「それが問題なんですよ」と言って、彼は仏教に関する他の懸念点を話し始めた。要するに、彼はひとつのことを信じているのであるが、彼の行いはそれに矛盾していると感じている。そこから彼は自分自身の仏教信仰に疑問を投げかけているのだ。ノンクリスチアンの信じていることと行いの間に見られる矛盾を見つけることは、その人の信仰のもろい点を浮き上がらせるのに重要な役割を果たす。

不協和音 3 : 信条VS信条

また別の不協和音とは2つまたはそれ以上の信条の間に矛盾があることである。これは、使徒の働き17:28-29に書かれているが、そこで使徒パウロは2つの違った信条について明らかにしている。パウロは「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。あなたがたのある詩人たちも、『私たちもまたその子孫である。』と言ったとおりです。そのように私たちは神の子孫ですから、神を、人間の技術や工夫で造った金や銀や石などの像と同じものと考えてはいけません。」と述べている。パウロはアテネの人々の信じていることの中にはふたつの主な矛盾点があることを明らかにしたのである。つまり一方でアテネの人々は自分たちが木の神々を作ったと信じていながら、もう一方でそれらの神々が彼らを造ったとも信じている、そうパウロは指摘したのだ。パウロは次のように問いかけている:「この両方の見方が本当なのでしょうか？」アテネ人は3つの違った反応をした。「パウロは狂っている」と言った人たちもいたが「私たちはもっと聞きたい」と応答した人たちもいた。そして、キリストを信じるという肯定的な応答をした人たちもいたのである。(使徒の働き17:32-34) 聖霊は、人々にその人のうちにある複数の信条の矛盾点に気づかせ、イエス・キリストに近づくことができるように助け、更にはキリストを受け入れるように導いてくださるのである!

私が大学のキャンパスで学生と話していた時、このような様々な矛盾について聞く機会に恵まれた。たとえば、ある学生は「イエス・キリストとはだれですか？神の子ですか？」と聞いてきた。そこで私は彼にイエスを救い主として信じているのか尋ねると、彼は「はい」と答えた。次に私は彼に信じている教えに従って生きているかと聞いてみた。彼はそうしていると答えた。そこで私が次にした質問は「基準に達していると思いますか」であった。彼の答えは私を驚かせた。彼は「私は結構いい人間だと思います」と答えたのであった。そこで次のように聞いてみた。「あなたが基準に達した生き方をしていると考えたら、なぜあなたは救い主イエスを必要とするのですか？」この質問に彼はしばらく考え込み、それから次のように答えた。「私はまだ基準に達していません。」このプロセスは伝道のためにとっても大切な部分である。なぜなら、もし私たちが人々に自分の不十分さに気づかせることがなければ、彼らを救うためにキリストが必要であるという意味がなくなって

しまう。私たちがしっかりと聞く耳を持ちさえすれば、私たちは信条と信条の間にある矛盾点を見出すことができるのである。

不協和音 4 : 非論理的信条

最後に述べる不協和音、矛盾点は、非論理的信条である。これはふたつの違った信条の中に見られるものではなく、ひとつの特定の信条の中に見られるものである。たとえば、「絶対的なものは絶対存在しない」という言明は確かに非論理的である。このように言われてしまうと、人はよりかかっている木の枝をのこぎりで切られるように感じてしまうのではないだろうか。「英語で表現できない」と言っても、何の意味もなさない。なぜなら、それを言うには英語を使うしか方法がないからである。これと同じように、何と多くの人々が非論理的信条の類に当たる似たような発言をしているか、それに驚かされることがある。たとえば、人々が「すべての宗教的な見解は本質的には正しい」と言うのを聞く。けれども、現実に関するすべての見解は、特に相反する見解の場合にその全てが真実だろうか。すべての見解が真実ということとはありえない。というのは、四方八方に広がる論点は全く論点がないのと同じことだからである。言い換えると、すべてのものを受け入れるということは、どこにもしっかり立っていないということである。このように、すべての見解を真実とするのは非論理的であり、結局どの特定の真理にも立っていないことになるということだ。

どの方向にも向けられているポイントはポイントとはならないからである。あらゆる方向に行くようにさし示されているということは、どこか特定の方向へと向けられているのではないのである。

ここまでのことを要約すると、ノンクリスチャンの友人が何を信じているかを理解するためには、まず彼らのことを聞かなければならないということである。そして、4つの種類の不協和音について学んだ。これらの不協和音とは：信条VS心の願い、信条VS行動、信条VS信条、そして信条VS非論理的信条である。これらのことについて学ぶと、ノンクリスチャンの友人たちに対して、より突っ込んだ質問をすることができるようになる。私たちがよりよい聞き手になるために、私たちの生きるこの時代についてよりよく理解できるように神が助けてくださいますように。（箴言 18:13）

あらゆる時代のクリスチャンは、それぞれの時代において、どのように意味深く話せばよいか考え、学んできた。それには常に変わっている現実の状況を十分に把握せずに解決することはできない。私たちがキリスト教の信仰を効果的に伝えようとするなら、今の時代の人々の思考回路を理解しなければならない。 フランシス・シェファール